今月の
ブックトーク

6月（水無月）「父の日」

前田 由紀
／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

父の日は、アメリカで1910年Sonora Smart Doddさんが母親亡き後、父親が男手ひとつで6人の子どもたちを育て上げたことに感謝して、父親の誕生月の6月に「父の日」を提唱し始まったそうです。6月の第3日曜日なので、今年は6月21日になります。

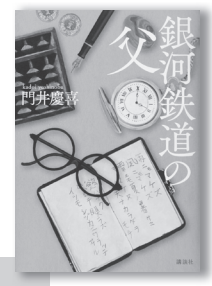
そこで、今回は父親にまつわるお話です。まず、絵本作家で大人気のヨシタケシンスケ著『**ヨチヨチ父**』です。そういえば、初めての赤ちゃんが誕生すると同時に親となるママとパパも新たに生まれることになります。母親は自分の体内から生まれるから誕生と同時の親近感は特別ですが、父親は妊娠時から何の変化もなく突然、誕生と同時に父親となるわけですから、実感がわかず子どもとどう接していいかも戸惑うわけです。生まれたてのヨチヨチ父の子育てですが、ユーモアを交えてほほえましく描いています。「育児でパパの役目は、ママを笑わせること」とありますが、その通りかも。

ヨシタケシンスケ・著
赤ちゃんとママ社
ポプラ社

次は、井上ひさしの戯曲『**父と暮せば**』です。広島の原爆で生き残った若き女性が、人並みの幸せを求めてはいけないと思っているところに、恋の応援団として原爆で亡くなった父親が彼女の前に現れます。自分の分まで生きて幸せになってほしいという父の切なる願い。「あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとるんじゃ。おまいの勤めとる図書館もそよなことを伝えるところじゃないんか。」この広島弁の言葉も胸に迫るものがあります。

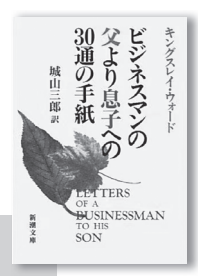
井上 ひさし・著
新潮社

『父と暮せば』で「岩手はうちらの憧れじゃった。宮沢賢治の故郷じゃけえねえ」のセリフが出てくるのですが、今度は宮沢賢治の父親のお話『**銀河鉄道の父**』です。裕福で町の名士でもあった賢治の父親は、長男である賢治を溺愛し、幼い頃赤痢になった時も閉鎖病棟で禁止されても夜通し看病するほどでした。家業の質屋に学はいらないという祖父の考えを覆し、賢治の進学の願いをかなえ、金銭的な援助も惜しみませんでした。しかし父親の期待に応えられない賢治の心の葛藤が大きくなり対立することも。「永訣の朝」の詩にある利発な妹トシの早逝の慟哭。賢治の文学世界の成り立ちが立ち上がってきます。二人の愛すべき子どもを亡くした親の哀しみはどれほど深いものだったか。しかし彼の心の中に温かく二人は生き続けているようにも感じました。



門井 慶喜・著
講談社

世界中どこでも父親が子を思う気持ちは変わらないようです。最後にアメリカの実業家による『**ビジネスマンの父より息子への30通の手紙**』です。「財産や事業など残すより、いちばん大切なのは、一生の経験から学んだ人生の知恵やノウハウの集積である。」心のこもった30通の手紙は、「常識」を基準をとし、挑戦、教育、成功、誠実さ、経験、結婚、礼儀、読書、幸福、友情、健康等多岐にわたって助言しますが、子を大切切に思う気持ちがひしひしと伝わってきます。



キングスレイ・ウォード・著
城山 三郎・訳
新潮社

※「今月のブックトーク」「図書館のこよみ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご活用ください。